



令和7年度 文教福祉常任委員会  
**行政視察報告**

# 視察概要1

---

## 視察実施日

令和7年10月15日(水)～10月17日(金)

## 参加者

委員長	柏田公和	副委員長	高橋由美
委員	成合進也	黒木英和	黒木高広
	三輪邦彦	近藤勝久	

## 視察概要2

---

### 視察先及び調査事項

[佐賀県伊万里市]

「伊万里市民図書館の運営について」

[佐賀県佐賀市]

「多職種(特に行政)と連携した不登校支援について」

[山口県萩市]

「萩市小中一貫教育について」

# 佐賀県伊万里市の概要

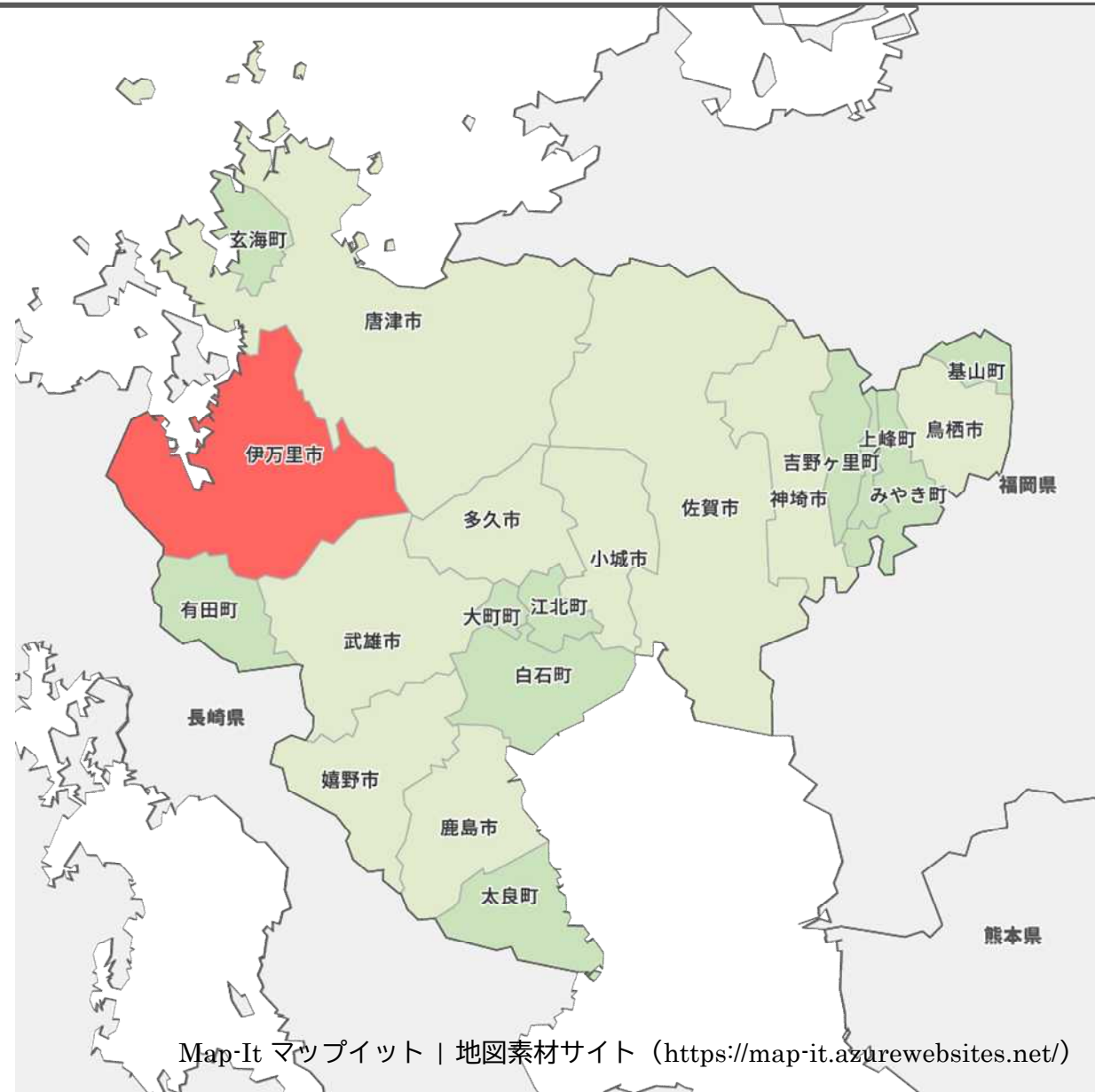
人口 51,298 人 (R7.3)

世帯数 23,882 人 (R7.3)

面積 255.24 km<sup>2</sup> (R7.3)

伊万里市は、佐賀県北部に位置し有明海に面した港町として古くから発展してきました。

歴史的には、江戸時代伊万里港は、日本各地や、海外への陶磁器輸出の拠点として栄えました。特に「伊万里焼」きは、優美な絵付けと繊細な造形で世界的に高い評価を受けています。



# 視察概要 伊万里市民図書館

## 視察先及び調査事項

[佐賀県伊万里市]

### 「伊万里市民図書館の運営について」

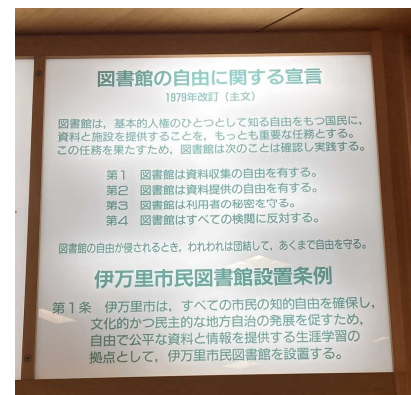
開館して30年を迎えた、伊万里市民図書館の運営に、民間の活力の活かし方、ボランティア団体との連携・協力の仕組み、市民が親しめる図書館の設置目的や、情報発信の仕方などについて学習しました。

また、「図書館フレンズ伊万里」の歴史や役割分担等の係わり方や、名言といわれる「自分たちが産んだ図書館を育てないと無責任になる」という考え方についても、学ばせてもらいました。

# 視察を終えた各委員からの所感

開館してから30年を迎え、建物には古さを感じるが、市民のニーズには十分に対応している図書館で、市民の文化活動に対応できる設備等が整備されている。

また、市民の読書意欲を向上させる仕組みが随所に見られた。隣町の武雄市の図書館を強く意識しながらも、意図的に異なる方法で図書館中心のまちづくりをしていると感じた。



当市においても、現在、市民参加型のワークショップを行い、市民と意見の把握に努めているが、今後それをいかに反映していくか、どう設計に取りいれていくかが課題になる。完成後の運営段階においても、伊万里図書館の様に市民が協働できる仕組みをつくる必要がある。

図書館は、構造上書架を低く抑えて、平面及び高さの空間を広くとることによって、リラックスできる環境が確保され、圧迫感も開放される。

人が集まるためには、どうすれば良いのか、どのようなものがあればいいのかの視点で考えていく必要がある。

# 視察を終えた各委員からの所感

職員23名中半数の12名が、司書資格を有していることが強みと感じた。

館内を視察して、市民との協働で運営していく事が、館内の雰囲気で見え感じ取った。

伊万里図書館設置条例の中で、設置目的が明文化されている。目的は、地域住民の福祉の向上、住民の生活や仕事に役立つこと。地域社会に貢献すること。

2トントラックを活用した全域平等配本サービスは参考にするべきだと感じた。

伊万里図書館の特色は、

- ①設置条例の中に、目的が明記されている。
- ②多くのボランティア団体との連携がある。
- ③市民協働が30年も続いている。
- ④全域平等サービス「ぶっくん」の取り組みを実施している。

昼食時間帯に、ボランティアの市民が、軽食の準備を初めている風景は、市民とのボランティアの連携が強く伺えられた。

## 視察を終えた各委員からの所感

市民に対して、図書館建設、運営に係わる「出会いの場」「知る場」「語る場」「考える場」と言った様々な「場」を提供していくことが、市民の意識変容をもたらし、行動変容につながるものと理解した。

図書館フレンズ伊万里は、市民参画や市民協働の中核的な役割を果たしている。また、市民ボランティア活動の調整役としての働きも特徴的で、市民として図書館を育てていく、支えていくという市民意識の醸成が具体的な協力・提案活動を実践することで、より良い(効果)を生み出し、その変化が更なる実践基盤を強化することにつながっている過程は大変参考になった。

開館準備段階から、「図書館建設懇話会」を設け、市民・行政・設計者が対等に議論し、ハードもサービスも住民の声を反映させた経緯は、単なる施設整備ではなく、自治の訓練そのものだと理解した。

指定管理者ではなく、設置条例に基づいて、市が責任主体を明確に「知る自由」「利用の秘密の保護」を掲げている点も文化的自治を支える制度設計として示唆に富みます。

令和7年度文教福祉常任委員会視察報告  
認定特定非営利活動法人  
スチューデント・サポート・フェイス S.S.F.

# 佐賀県佐賀市の概要

人口 225,700 人 (R7.3)

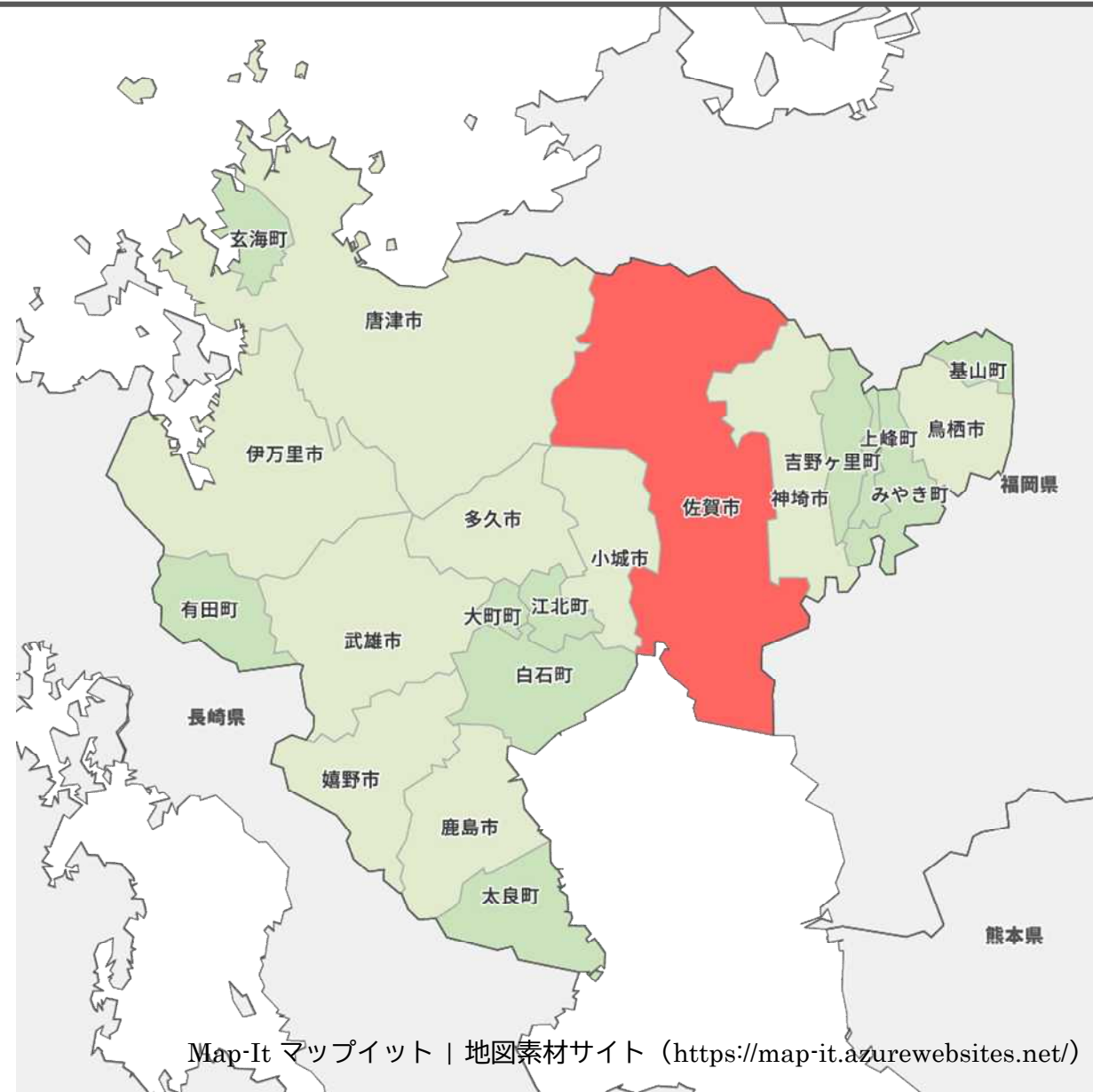
世帯数 104,772 世帯 (R7.3)

面積 431.81 km<sup>2</sup> (R7.3)

佐賀市は佐賀県の県庁所在地として、政治・経済・文化の中心地です。江戸時代には佐賀藩の城下町として栄え、佐賀城や武家屋敷など歴史的建造物が現存しています。幕末期には、鍋島藩が洋楽や化学技術の導入に積極的で、佐賀藩精錬方による鉄製大砲の製造など、日本の近代文化に大きく貢献しました。

地理的には、広大な佐賀平野が広がり、筑後川や嘉瀬川などの河川が潤す肥沃な大地が特徴です。

佐賀市は歴史と現代が融合する、豊かな文化と自然に恵まれた都市です。



## 視察先の概要

# 認定特定非営利活動法人 スチューデント・サポート・フェイス S.S.F. (STUDENT. SUPPORT. FAITH.)

代表理事 谷口仁史

## 不登校、ひきこもり、非行、ニート等

社会生活を営む上での困難を有する

子ども・若者及び家族等関係者を主たる対象

アウトリーチ(訪問支援)とネットワークを活用した

総合的な支援事業を展開することによって

当事者の社会参加・自立に寄与すると共に、  
社会的孤立・排除を生まない支援体制の

確立に向けた「協働型」「創造型」の取組を  
推進することによって関連する社会問題の解決に  
資することを目的とした団体

## [創立・設立]

団体創立日 平成15年(2003年)7月5日

法人設立日 平成15年(2003年)10月23日

## [組織体制]

有給職員 常勤53名 非常勤19名

NPO法上の社員数 239名

※令和4年5月31日時点

## [事業内容]

- ◇アウトリーチ(訪問支援)事業
- ◇コネクションズ事業
- ◇教育支援事業
- ◇キャリア形成支援事業
- ◇メンタルヘルス事業
- ◇支援ネットワーク事業
- ◇シンクタンク事業
- ◇無料職業紹介事業
- ◇その他上記事業に付帯する諸事業

## S.S.F. が実施している委託事業(R6年度)

### 佐賀労働局

- ▷ 地域若者サポートステーション事業

### 佐賀県 (こども未来課／こども家庭課／障害福祉課／教育委員会事務局学校教育課)

- ▷ 地域若者サポートステーション公認心理士・臨床心理士カウンセリング事業
- ▷ 地域若者サポートステーションとの連携による子ども・若者寄り添い支援事業
- ▷ 佐賀県子ども・若者総合相談センター事業
- ▷ 次の時代を担う指導者の発掘・人材育成のための研修事業
- ▷ 佐賀県ひきこもり地域支援センター事業
- ▷ 訪問支援による社会的自立サポート事業
- ▷ 佐賀県ヤングケアラー関係研修事業
- ▷ 佐賀県ヤングケアラー支援体制強化事業 ※補助事業

### 佐賀市

- ▷ 不登校児童生徒支援業務
- ▷ 佐賀市生活困窮者自立支援事業
- ▷ 生活困窮者就労準備支援事業
- ▷ 生活困窮世帯の子どもに対する学習・生活支援事業
- ▷ 佐賀市生活困窮者自立支援機能強化事業
- ▷ 佐賀市青少年センター子ども・若者相談支援業務
- ▷ 佐賀市発達障がい者等相談支援業務



## 不登校、ひきこもり、非行、ニート等

社会生活を営む上での困難を有する

子ども・若者及び家族等関係者を主たる対象

アウトリーチ(訪問支援)とネットワークを活用した  
総合的な支援事業を展開

## Point:改善率(9割)

派遣先の9割以上の家庭(世帯)から  
学校復帰、ひきこもり状態からの脱却、  
進学・就職等、当事者側から見る  
客観的な改善報告が寄せられている。

- ▶ 働くことに悩みを抱える15歳から49歳の若者に対する就労支援
- ▶ さまざまな困難を抱える子ども・若者の社会参加や社会的自立の支援
- ▶ ひきこもりの状態にある本人やその家族の相談支援
- ▶ 不登校児童生徒の社会的自立を支援
- ▶ ヤングケアラーに対する相談窓口設置、支援体制整備

# 子ども・若者が抱える問題の深刻化・複雑化

Q: 困難を抱える子ども・若者は増えているか？



対人問題／コミュニケーション障害／いじめ被害／身体的虐待  
性的虐待／ネグレクト／DV／貧困／ネット依存／SNS依存  
出会い系サイト被害／少年犯罪／暴力行為／摂食障害  
リストカット／うつ／学習障害／発達障害／自閉スペクトラム症  
借金／闇バイト／…

A: 困難を抱える子ども・若者は増加傾向

子どもの貧困率は長らく上昇傾向にあり、  
若者のホームレスや心身の不調が増加しているだけでなく、  
**虐待、不登校、ひきこもり、家庭の貧困や機能不全など  
複合的な問題を抱える若者も増えている。**

これらの問題は「**社会的排除**」という一つの大きな問題に  
繋がっている。

※既存の支援体制では対応しきれしていない

## ◇貧困と格差の拡大

子どもの貧困率は高止まりしており、貧困家庭の子どもたちが  
不利益を被るなど、教育や体験の格差も広がっている

## ◇身近な困難の増大

家庭環境(親の失業や病気、親の不在、DV、虐待)などにより、  
幼少期から複合的な困難を抱える子ども・若者が増えている

## ◇生活困窮の若者増加

友人宅やネットカフェでの寝泊まりなど、見えにくい形で  
生活困窮する若者が増加している

## ◇心身の健康問題

若者が適切なサポートを受けられず、うつ病や不安障害に  
悩まされるケースが増え、学業や仕事への意欲低下、  
社会参加の機会の喪失に繋がる

## ◇社会的排除の問題

高校中退、非正規就労、生活保護受給、自殺など、  
様々な問題を抱える若者が増加し、これらの問題は  
「社会的排除」という共通の枠組みで捉えることができる

「**社会的排除**」 ソーシャル・エクスクルージョン  
貧困や障害、失業など、さまざまな要因によって  
人が社会から「**取り残されていく**」状態

対義語:「**社会的包摂**」 ソーシャル・インクルージョン

### 1. 若者の自発的な相談行動を前提とした 施設型・来訪型支援の限界

専門家の配置や相談窓口の開設等「施設型」「来訪型」支援が公的支援の主流である。  
これらの窓口の多くは当事者の自発的な相談行動を支援の前提としている。

「相談に来ることを待つ」従来型の支援では、本来支援が必要な子ども・若者にアプローチできない。

### 2. 直接的支援の不足

不登校、ひきこもり、非行、ニート等の支援機関では、表面的な状態を改善するための助言・指導、カウンセリング、適応訓練、投薬等、本人に対する対応が中心となっている。

いじめ被害による自殺、虐待による致死事件等に象徴される生育環境に課題を抱える子ども・若者に対する支援が不十分。  
生育環境にアプローチする積極的かつ直接的な支援が必要。

### 3. 縦割りの問題

年齢別、問題別に相談窓口等が設置されたことで専門性の向上はみられるものの、それらが専門化、分化し、有機的につながっていない。  
複数の公的支援を受けながらも自立が達成されない子ども・若者の存在。

複合的な課題を抱えるケースなどは、問題の解決や社会参加・自立まで見届けられる体制が必要。

例えば、不登校問題、義務教育段階は幾重にも対策が講じられているが、高校に入ると一気に手薄になる。  
中退をしてしまうと適切な支援に結びつく事自体が難しくなる。

公的支援の限界を補い分野横断的な対応を可能とする専門的手段

「相談」、「支援」を届ける！  
アウトリーチ(訪問支援)が重要



# 重層的な支援者ネットワークづくり

従来の枠組みをこえた支援を可能にするために…

S. S. F. が「**ハブ機能**」(※)の役割を担うことで、重層的な支援ネットワークを構築

※多岐にわたる支援機関や専門家、当事者、ボランティアなどを**結び付け、情報やリソース、人をつなぐことで、ネットワーク全体を機能させる中心的な役割**

## 4. 法制度に基づく協議体

佐賀県子ども・若者支援  
地域協議会

佐賀県生活困窮者自立支援  
連絡会議

佐賀県ひきこもり対策連絡  
協議会

佐賀県就職氷河期世代活躍  
推進プラットフォーム

※いずれもS. S. F. が  
参画または事務局担当

## 2. 直接的な相談支援のための連携協力

- ◇職親
- ◇若者の味方隊
- ◇子どもと命を考える会
- ◇さがユースフルボランティア
- ◇居住支援ネットワーク
- ◇子どもシェルター

- ◇佐賀障害者就労支援促進ネットワーク
- ◇少年の立ち直り支援ネットワーク強化に向けた意見交換会
- ◇佐賀災害支援プラットフォーム
- ◇子どもの居場所ネットワーク
- ◇思春期ネットワーク佐賀
- ◇佐賀県教育研究ネットワーク



S. S. F.  
子ども・若者育成支援推進法に  
基づく「**指定支援機関**」

1. 全体を把握するための緩やかな連携  
青少年サポートネットワーク in SAGA  
※協力機関1,000団体以上

## 3. 調査研究、情報交換、 助成等のための協議体

- ◇さが・こども未来応援プロジェクト
- ◇九州若者サポートネットワーク
- ◇スクーリングサポートネットワーク
- ◇佐賀県食でつながるネットワーク協議会
- ◇若年無業就労支援者ネットワーク

## 5. 社会的取組推進のための全国規模の連携

- ◇生活困窮者自立支援全国ネットワーク
- ◇コミュニティ・メンタルヘルス・アウトリーチ協会

- ◇全国子どもの貧困・教育支援団体協議会
- ◇若者協同実践全国フォーラム

- ◇全国若者支援ネットワーク機構
- ◇日本アウトリーチ協会

# 「アウトリーチ」とは？

Outreach 直訳「外に手を伸ばす」

## □ 福祉分野におけるアウトリーチ活動の定義

支援が 必要であるにもかかわらず届いていない人 に対し、行政や支援機関などが 積極的に 働きかけて 情報・支援を届ける プロセス。

支援の入り口 を積極的に作ることで、  
早期発見・介入が可能 となる。

生活課題の 複雑化・深刻化を防ぎ、  
効果的な支援 を提供することができる。

**Point** 支援対象者との  
信頼関係構築の機会を創出

従来の 相談に来ることを待つ 対応では、  
必要な支援につながらない。  
時間の経過 とともに、課題が 複雑化・深刻化 し、  
命に係わるような課題へと発展する



支援が届かない理由は？

「社会に様々な 制約や障壁 が存在するから」

- ▶ 心理的な障壁  
コミュニケーションでの傷つき体験  
これまでに相談で嫌な想いをしている
- ▶ 周囲の目  
社会的偏見・差別(スティグマ)  
自分は支援を受ける対象である
- ▶ 物理的な制約  
生活時間と支援機関の対応時間が合わない  
出るために何らかの支援を必要とする
- ▶ 情報の届け方  
そもそも支援があることを知らない  
情報を知らされていない、知るすべがない

社会・環境の要因 / 支援機関の要因 / 当事者の要因

## 相談室対応とは異なる **アウトリーチ現場の特殊性**

### 1. 困難事例が多い

- ▷ 「最後の手段」としての利用
- ▷ 複数の相談支援の失敗を経験
- ▷ 孤立状態の長期化による問題の深刻化・複合化
- ▷ トラウマなどによるメンタルヘルスの問題…

### 2. 相談意欲が低い

- ▷ 対人関係の苦手意識
- ▷ 警戒心、恐怖心、無力感、絶望感
- ▷ 学校不信、社会不信、人間不信
- ▷ 認知のゆがみ…

### 3. 関係性が複雑

- ▷ 本人との関係性の構築の難しさ
- ▷ 親や兄弟、友人などの複数の人間との接触
- ▷ 家族間の関係などへの配慮
- ▷ 限られた人間関係の中での依存…

### 4. 危険性が高い

- ▷ 追い詰められた心理状態
- ▷ 家庭内問題に関わるリスク
- ▷ 自殺企図や暴力など自傷他害のリスク
- ▷ 家族や第三者との接触による危険性…

## 思春期の子ども・若者対応で **配慮すべき特性**

- ◇ 第二次性徴で、心身ともに著しい変化を遂げる
- ◇ 自意識や感受性が強く環境からの影響を受け易い
- ◇ 自己確立の過程で、心身ともに不安定な状態に陥り易い
- ◇ 成人への過渡期にあり、考えと行動に矛盾を抱えやすい
- ◇ 反抗期のため親や教師、大人に反抗的になりがち
- ◇ ルールなどに束縛を感じ、自由を求める傾向
- ◇ 友達や恋人など第三者との関係が大きな影響力を持つ

## 従来型の家庭訪問の問題点

- ◇ 単一機関や単一分野の知見に偏った支援ノウハウ
- ◇ 個人の資質や経験、美談や根性論に基づいた訪問活動

**決定的失敗や2次被害を生む「危険性」**

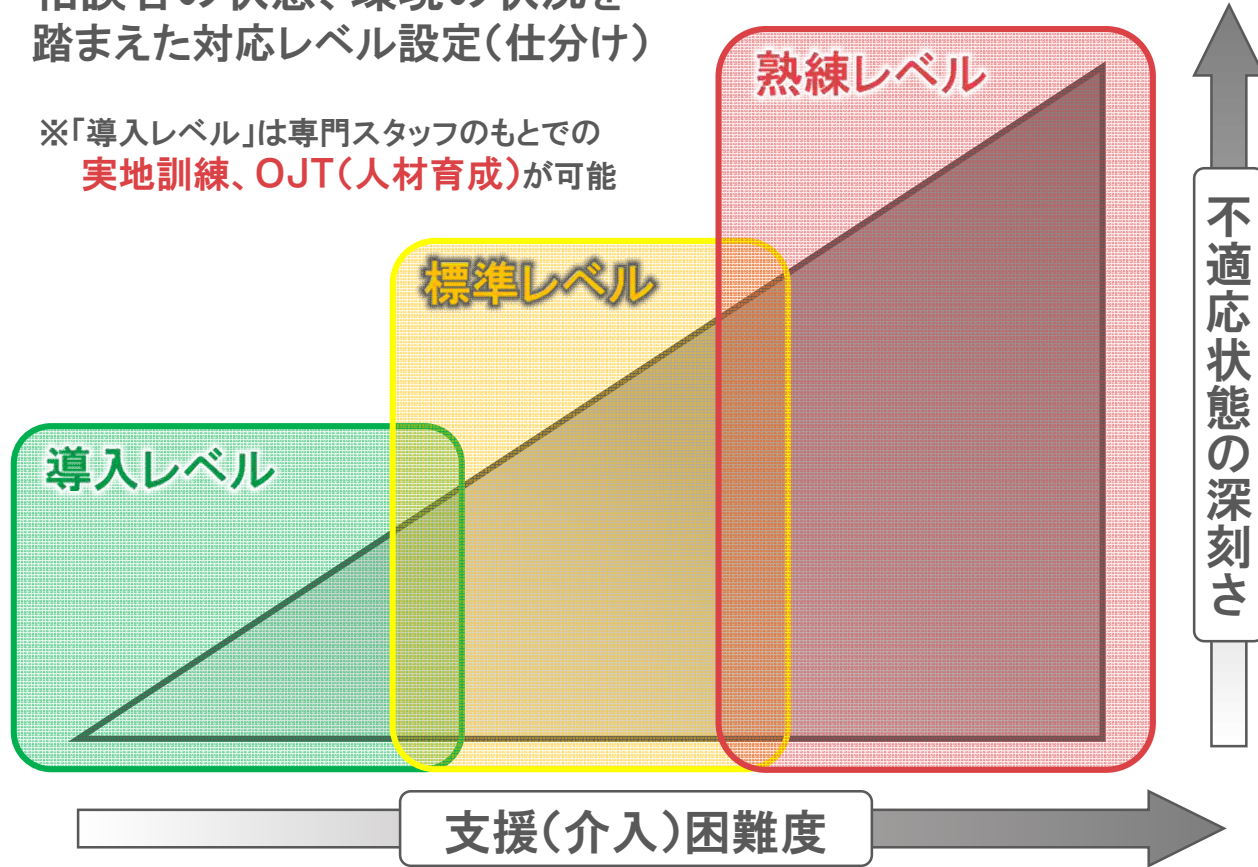
※義務関係や権力、強制力を背景にした配慮なき訪問支援は支援者側の認識にも偏りを生むリスクが高い

**「アウトリーチ」とは？**

# S.S.F.の「アウトリーチ」実施体制

相談者の状態、環境の状況を踏まえた対応レベル設定(仕分け)

※「導入レベル」は専門スタッフのもとでの  
実地訓練、OJT(人材育成)が可能

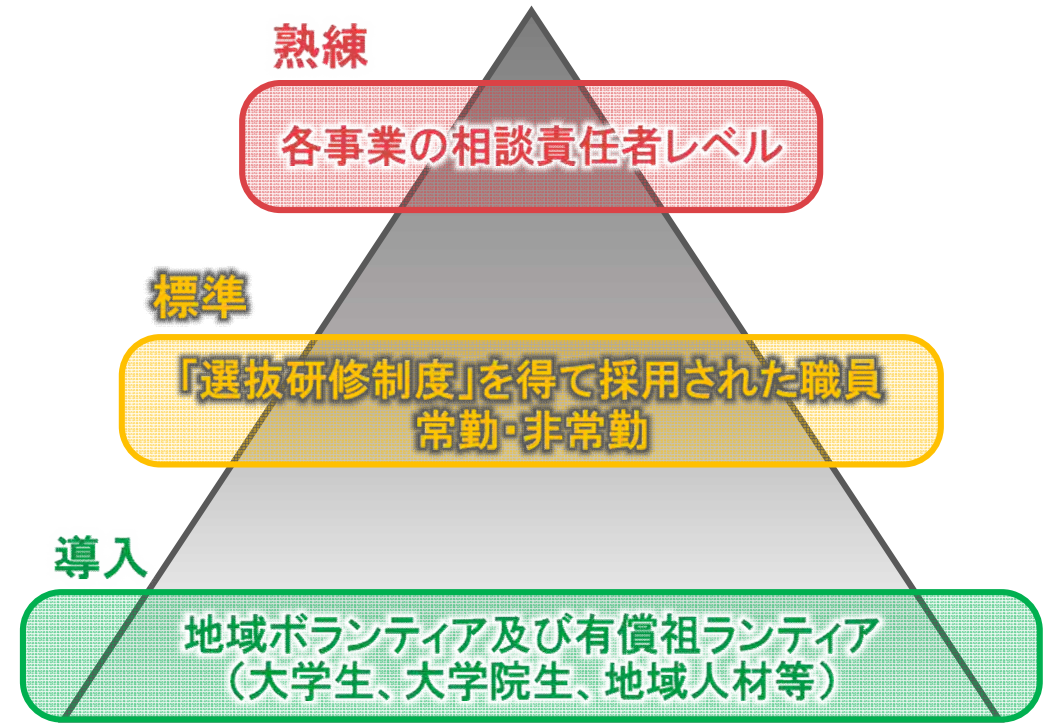


**所属あり**  
学齢期・就学期  
家族機能良好  
受容的・寛容的

**不安定な所属**  
中退後、卒業後  
家族機能低下  
指示的・悲寛容的

**所属なし**  
社会的孤立  
家族機能不良  
虐待・多重困難

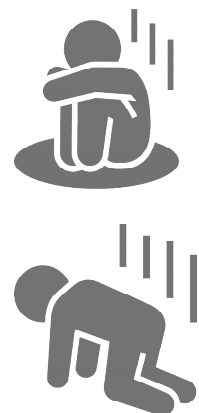
## 支援介入困難度等による役割分担と 複数の専門職によるチーム対応



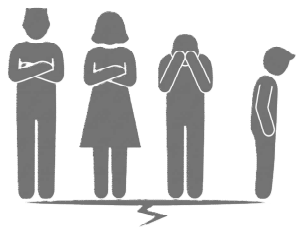
※約250名の登録スタッフ、有給職員約80名のうち6割近くが20代から40代

**「価値観のチャンネルを合わせる！」**  
徹底した危機管理のもと、関係性を重視した  
**「お兄さん」、「お姉さん」的支援員**(ナナメの関係性)を積極的に活用

# 「アウトリーチ」で「相談」、「支援」を届ける



本人支援



環境支援



アウトリーチ  
「相談」、「支援」



アウトリーチ  
「支援調整」



支援関係機関



伴走型支援



社会参加・自立



環境変化

ネットカフェ難民／貧困／適応障害／非正規労働／拒食／うつ病／校内暴力／統合失調症  
性的虐待／自傷行為／自殺企図／薬物依存／被害妄想／児童買春／離人感神経症／共依存  
要保護児童／非行／情緒障害／強迫神経症／社会不安障害／自閉症／殺人予告／睡眠障害  
ゲーム依存／薬物依存／疲労感／自信喪失／不合理な思考の悪循環／異常行動／児童虐待  
対人恐怖症／家出／孤独感／過食／自己肯定感の低下／孤立感／虚無感／不登校／ニート  
家庭内暴力／潔癖症／脱法ドラッグ／発達課題の未消化／錯乱状態／自己否定／社会不信  
発達障害／退行／ADHD／恐喝／協調性の欠如／人間不信／ネット依存／リストカット  
社会性の未発達／ワーキングプア／コンプレックス／いじめ／教育機会の喪失／学習障害  
ドメスティックバイオレンス／ひきこもり／アダルトチルドレン／青少年犯罪…

乳幼児期

学童期

思春期

青年期

ポスト青年期

## 委員所感

---

スチューデント・サポート・フェイスのような、アウトリーチ(訪問支援)と重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチができる団体が存在していることは、福祉業界の希望であり、これからの道しるべになるように感じた。

本市において同じレベルの活動を現段階ですることは難しいが、いずれはこのような支援ができるように、組織づくり、仕組みづくりを官民一緒になって考えていかなければいけないと思われる。そして成功するために、活動の中心となる人材が、ひとりふたり必要であろう。

[所感1]

従来の「施設型」「来訪型」の支援から、確実に対象者にアプローチできるアウトリーチは、今後ますます重要となってくる。述べたように、課題が「深刻化・複合化」している中では、多職種間の連携での対応が効果的になってくる。いかに、多職種のコンサルを求めやすい環境を構築するかが肝となる。

人材不足が言われている中で、その理念に賛同できるネットワークを築けるか、また、やりがいのある条件を提供できるかが、課題となる。深刻な課題になれば、24時間対応の必要に迫られはしないかが懸念される。

[所感2]

## 委員所感

佐賀大学の学生がボランティアの多数を占めており、地域に大学が存在する強みを活かしている。

一方で、膨大な資料や説明のスピードから、そのノウハウを短時間で読み取ることの難しさも感じた。

[所感3]



「どんな境遇の子ども・若者も見捨てない」の願いを実現するために、アウトリーチ（訪問支援）と重層的な支援ネットワークを活用した多面的なアプローチを実施している。主な特徴は以下の点である。

- ①佐賀県や佐賀市を中心とした協働実践
- ②「ワンストップ型」に近い相談サービスの全県での提供
- ③生活困窮者自立支援法に基づく「佐賀市生活自立支援センター」
- ④総合相談窓口「佐賀県ヤングケアラー専門相談ダイヤル」

[所感4]

## 委員所感

S.S.F.は、不登校、ひきこもり、非行等、社会生活を営む上での困難を有する子ども・若者及び家族等関係者を対象に、アウトリーチと包括的相談支援を実践している。

注目すべきは、支援対象の9割以上の家庭から学校復帰や進学・就職等の客観的な改善報告が寄せられているという、極めて高い改善率である。これは「相談に来ることを待つ」従来型支援の限界を補い、分野横断的な対応を可能とする専門的手段であり、支援のあり方を改めるものである。

この実践を可能とする背景には、佐賀県における「子ども・若者支援地域協議会」の機能がある。S.S.F.が重層的な支援ネットワークの「ハブ機能」を担うことで、1,000団体以上の協力機関と連携し、入口から出口まで一貫した「ワンストップ型」の支援を可能にしている点は大変参考になる。

現場では相談者の状態を踏まえた支援対応レベル（支援介入困難度）の仕分けを行い、複数の専門職による「チームアプローチ」を徹底しており、それが高い改善率につながっている。

専門性に裏付けられた支援根拠に基づく丁寧な包括的相談支援は、日常生活において困難を抱える世帯から真に求められているものである。

本市においても、課題属性ごとの支援から、ライフステージを見通して積極的に情報や支援を届ける「チームアプローチによる伴走型支援」の仕組みづくりが必要である。

そのために、ネットワークを機能させる中心的な役割である「ハブ機能」をどこが担うかということは、大変重要な要素であると理解する。

[所感5]

## 委員所感

佐賀市の認定NPO法人スチューデント・サポート・フェイスは、孤立・困難を抱える子どもや若者への「プッシュ型」「アウトリーチ型」支援を先駆的に実践し、行政の補完機能を果たしています。

孤独・貧困・虐待など複合化する課題に対し、分野横断的なネットワークを築き、伴走型で支える仕組みが成果を上げている点は大きな学びでした。

単発支援でなく、生活困窮者自立支援法改正の理念に沿って、複数年単位での見守りと信頼関係の構築が重要であると理解しました。

支援の根幹は制度ではなく「人」であり、地域全体で育てる人材こそが共生社会を支える礎であると感じました。

[所感6]

佐賀市の取り組み自体が、全国のトップランナーに位置づけされている程、アウトリーチによる若者の自立支援の推進は、より多くの関係者の協力体制が整わないと難しいと感じながら、人口減少や、少々化・高齢化が進む地方の自治体では難しいと感じた。

事業・施策の展開には、何が切り口になってくるのか、不登校の子供達の改善すべき対策など、教育分野と、福祉分野の連携強化と、核となる人材の確保など、道程は厳しいと言わざるを得ない。常に情報交換と共有の仕組みが大事になってくる。

[所感7]

## 支援の在り方の根本的転換

今回の視察を通じ、子ども・若者支援において「**待つ支援（施設型・来訪型）**」から「**届ける支援（アウトリーチ・プッシュ型）**」への転換が不可欠であることを再認識した。

特に、S.S.F.が実現している改善率9割という驚異的な数字は、**単なる一時的な介入ではなく、対象者の生活環境そのものに深く関わり、出口（社会参加・自立）**まで見届ける伴走型支援の正当性を証明している。

## 「ハブ機能」と「重層的ネットワーク」

S.S.F.の強みは、単独の団体活動に留まらず、行政、医療、教育、雇用など1,000を超える機関を結びつける「**ハブ機能**」を担っている点にある。

### ▶ 分野横断的な連携

縦割り行政の弊害を排し、年齢や課題（不登校、ひきこもり、ヤングケアラー等）で区切らないワンストップの支援体制。

### ▶ チームアプローチ

困難度に応じた役割分担と、多職種専門家によるチーム支援が、現場の負担軽減と質の向上を両立させている。

### ▶ 地域資源の活用

地元大学（佐賀大学等）の学生ボランティアを巻き込むなど、地域全体で子どもを育てる土壌がある。

## 導入に向けた課題と展望

S.S.F.のような全国トップランナーの仕組みを直ちに本市で完全再現することは容易ではないが、将来的な実装に向け以下の3点を段階的に進める必要がある。

### 1. 人材確保と育成

ネットワークの核となり、全体をコーディネートできる「プロフェッショナルな人材」の育成。  
やりがいと適切な労働条件を両立させた組織づくり。

### 2. 官民協働の仕組み構築

行政の制度的枠組みと、民間NPO等の柔軟な機動力を融合させた、本市独自の「ハブ組織」の検討。

### 3. 教育と福祉の連携強化

不登校や非行といった課題に対し、学校現場（教育）と支援機関（福祉）が情報を共有し、早期に介入できるネットワークの構築。

## こども・若者支援の道しるべ

「どんな境遇の子どもも見捨てない」という理念を具現化するためには、制度の整備以上に、その理念に賛同する人々の繋がりが重要である。

人口減少や少子高齢化が進む地方自治体において、課題が複雑化・深刻化する今こそ、公的支援の限界を補完するS.S.F.のような「多面的アプローチ」を本市の道しるべとし、官民一体となって共生社会の礎を築いていかなければならない。



2025年

# 視察報告

小中一貫教育 × 地域連携(コミュニティ・スクール)  
人口減少下での教育の質確保と、学校再編の進め方を学ぶ

文教福祉常任委員会

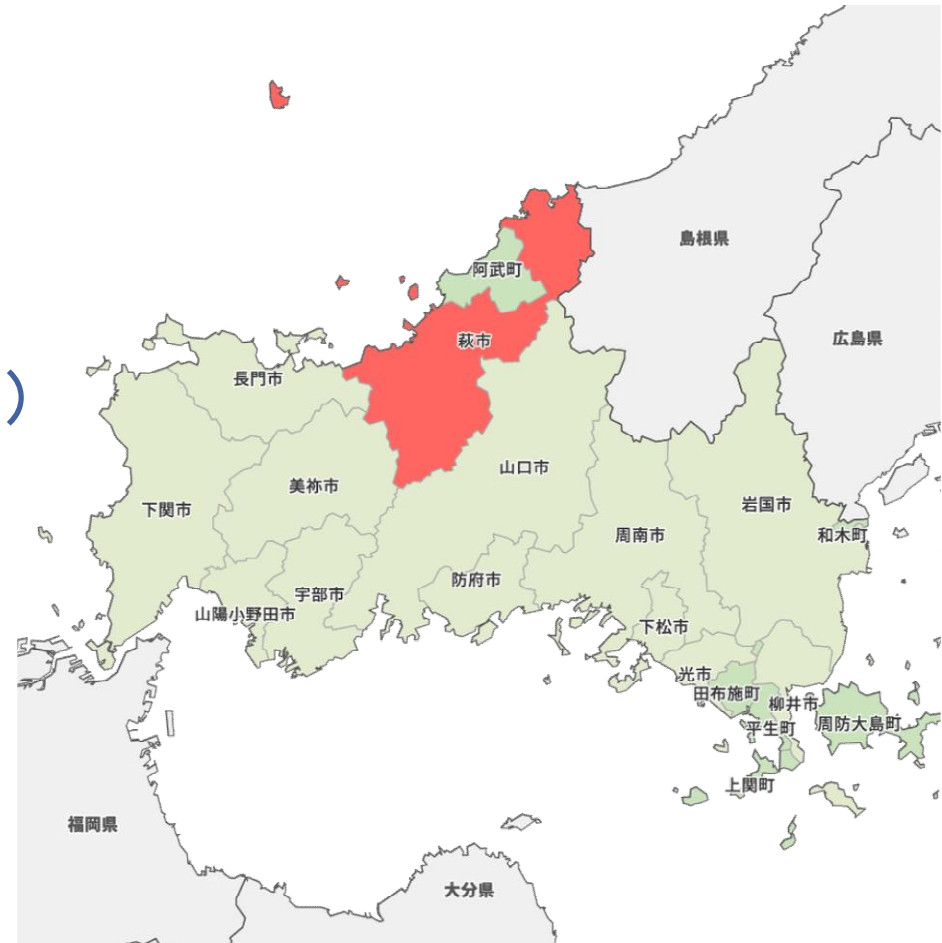
## 山口県萩市の概要

人口 42,078 人 (2025年3月)

世帯数 22,153 世帯 (2025年3月)

面積 約698.3 km<sup>2</sup>

萩市は山口県北部の日本海沿い、山地が大半で阿武川河口に市街地。農水産と萩焼が名物。城下町景観や維新史跡、世界遺産を活かし観光振興。



# 視察内容

- 01 教育基本方針の説明
- 02 小中一貫教育の説明
- 03 博物館・施設見学(萩・明倫学舎)



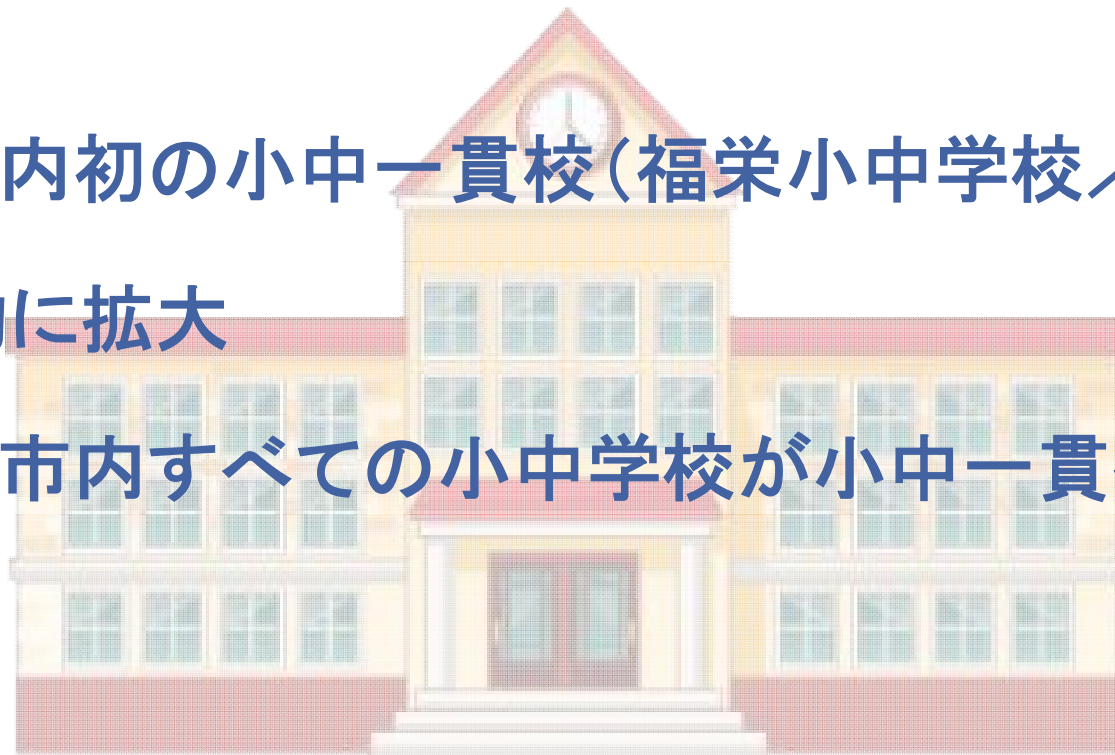
## 導入背景：人口減少と学校の小規模化

- 児童生徒数：小 1,325名／中 804名
- 学校数：小 17校／中 13校
- 小学校17校中 14校が複式学級
- 小規模化の中で「教育の質」をどう確保するかが課題



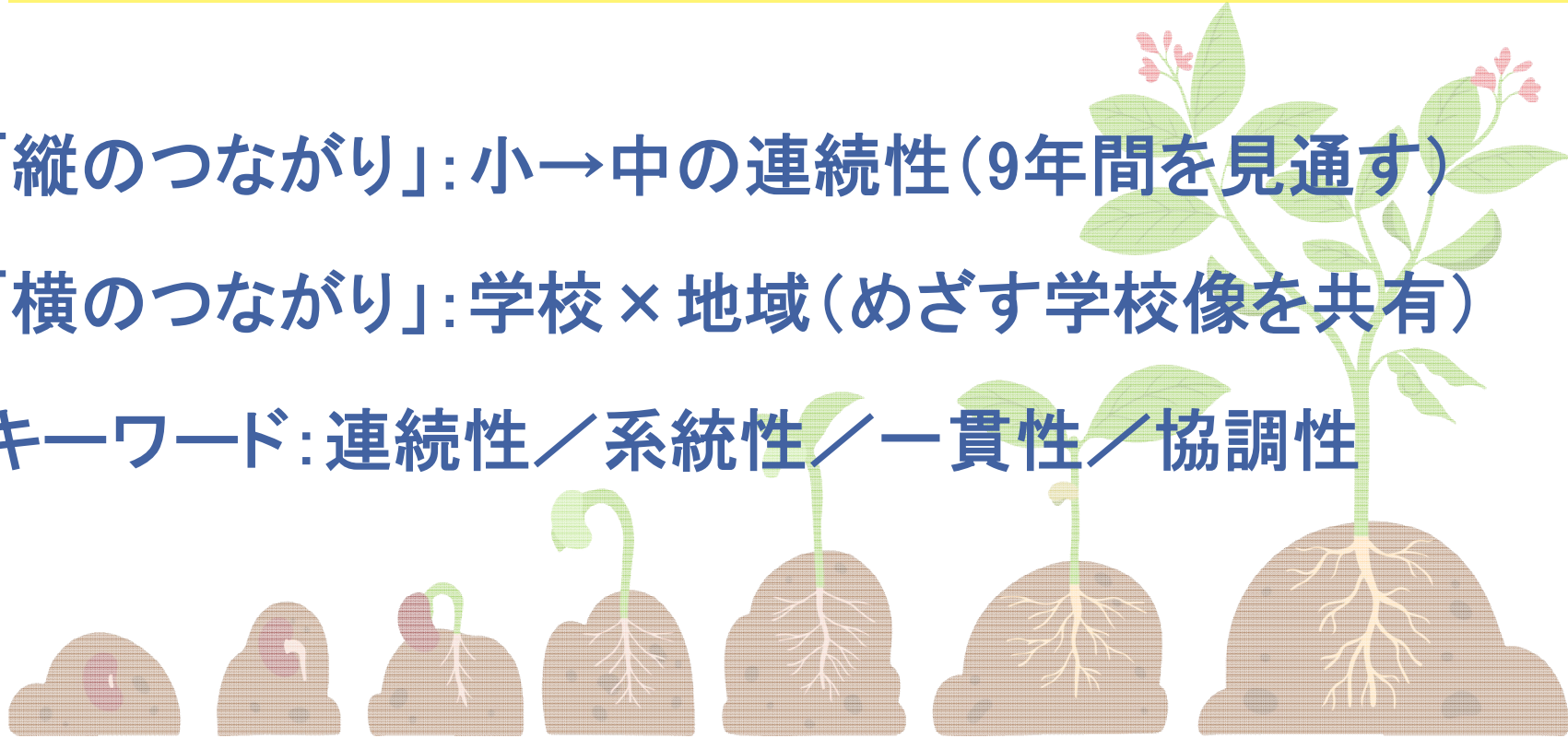
## 小中一貫教育の歩み

- 平成28年：県内初の小中一貫校（福栄小中学校／施設一体型）
- 以降、段階的に拡大
- 令和5年4月：市内すべての小中学校が小中一貫教育校に



## 萩市の考え方：縦×横で設計する

- 「縦のつながり」：小→中の連続性（9年間を見通す）
- 「横のつながり」：学校×地域（めざす学校像を共有）
- キーワード：連続性／系統性／一貫性／協調性



# 教育目標と特色

- 学校教育目標

「ふるさと萩を誇りとし、高い志を抱き、人や社会と積極的に  
関わる子どもの育成」

- シビックプライド・志教育

- 子どもの主体的参画(熟議)＋地域の大人・高校生との協働

# 成果

- 小→中のスムーズな接続／生徒の安心感
- 生活・学習規律の定着
- 郷土愛・自己有用感・思いやりの向上
- 教科担任制による学習意欲向上
- 教職員の意識向上（小中の垣根を越える）

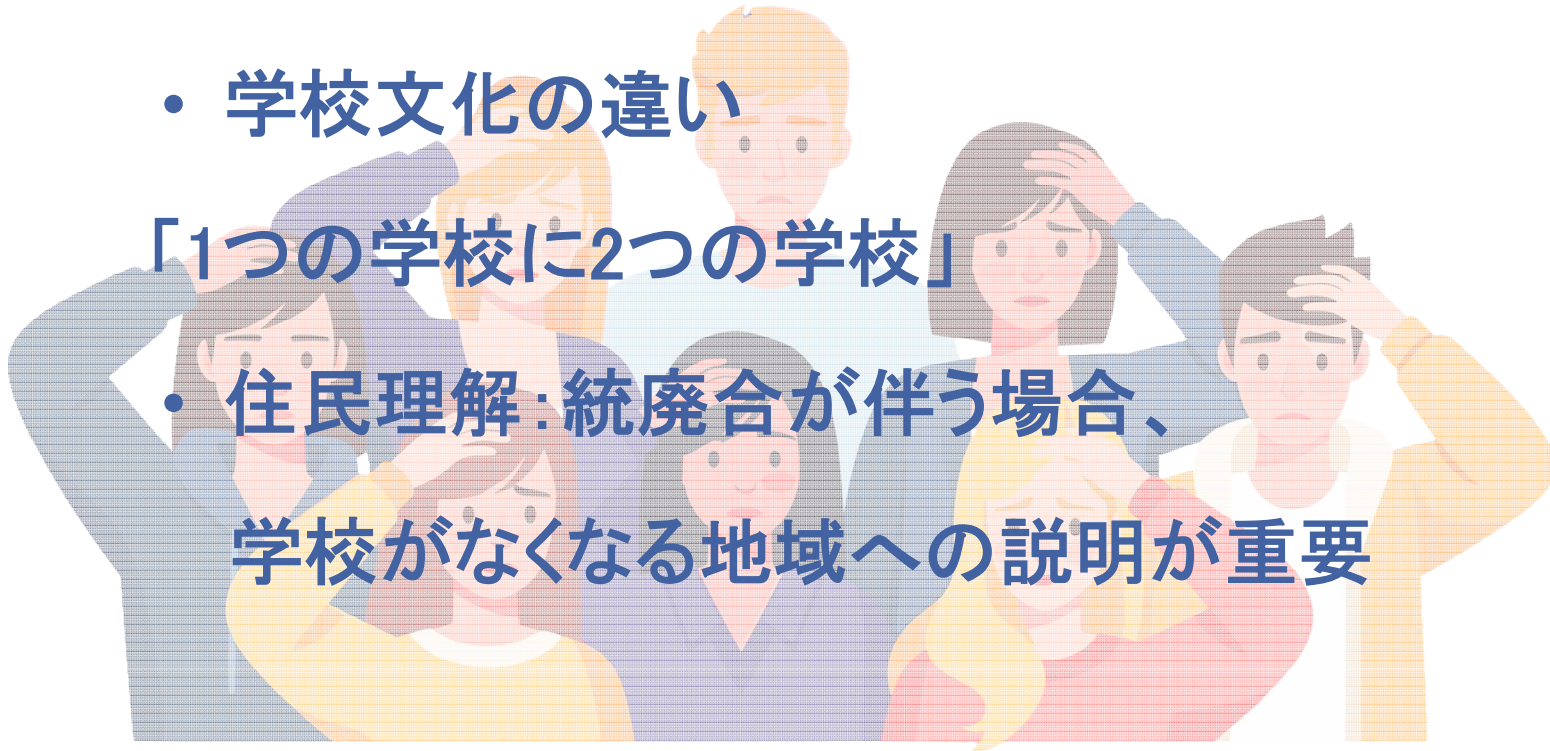


# 課題

- 学校文化の違い

「1つの学校に2つの学校」

- 住民理解: 統廃合が伴う場合、  
学校がなくなる地域への説明が重要



## 制度の形態：地域に合わせて使い分け

- 形態：施設一体型／分離型／隣接型（複合型も）
- 小規模校の弱点補完：遠隔での合同授業なども実施



## 日向市への示唆

- 学校再編は「統廃合」だけでなく、9年間の学びの設計として提示する
- 地域連携(コミュニティ・スクール)を同時に強める
- 丁寧な情報提供と協議の場が不可欠(保護者・地域・関係者)
- 目標:子どもを地域全体で育てる“日向型共育モデル”へ

